

る冠拡張薬。河合忠一編：狭心症，111-115頁，116-127頁 金原出版，1978。

7) 浦岡忠夫，杉本恒明： β -遮断薬の作用。織田敏次編：内科セミナー，不整脈，173-196頁 永井書店，1978。

6. その他

1) 杉本恒明：病態生理学研究的在り方。呼吸と循環 26(5)：411，1978。

2) 杉本恒明：心臓ペースティング試験の経験から。心臓 10(11)：1121-1122，1978。

内 科 学 (3)

助教授 井上 恭一

1. 研究概要

1) 肝炎ウイルス研究の現況

最近1年間において肝炎ウイルスの研究は格段の進歩を遂げた。すなわちA型肝炎についてはA型肝炎ウイルス(HAV)に対する抗体の検索が行なわれることが可能となり，従来非B型急性ウイルス肝炎とされていた症例のうち，かなりの部分がA型肝炎と確診されることとなった。B型肝炎の抗原抗体については従来よりHBs抗原抗体，HBc抗原抗体，HBe抗原抗体の3系があることが明らかにされ，それぞれの意義についての検討がなされて来た。とくに最近ではHBe抗原抗体系が重要視され，HBs抗原陽性肝疾患の中で，HBe抗原陽性例ではその肝組織病変が高度であること，またB型肝炎ウイルス(HBV)の感染性を示す指標として重要であることなどが指摘されて来た。一方HBe抗原とともにHBV増殖の指標としてDNAポリメラーゼ活性値(DNA P)も検索されるようになり，我々の教室においても慢性肝炎の経過中DNA Pの高値を示す症例で，急性増悪を示す例が経験され，ウイルスの増殖と肝病変の進展との間に関連があることが明らかにされた。

肝炎の治療に関してはインターフェロン，およびそのインデューサー，トランスファーファクターなどに関心もたれているが，これらについては今後の研究課題と考えられる。

2) アルコール性肝障害研究の現況

昨年の研究概要でも述べた如く，アルコール性肝障害の成因についてはアルコールによる直接的な肝障害作用のほか，飲酒に伴う栄養障害，免疫異常あるいは我々が以前より述べて来たHBV感染の加重があげられる。かかる観点から昨年度はアルコール

性肝障害の成因と病理について再検討を加え，日本肝臓学会東部会のパネルディスカッションにおいて発表した。

2. 学会報告

井上恭一：アルコール性肝障害の臨床と病理(パネルディスカッション)，日本肝臓学会東部会，1978，10，松本。

3. 著書

井上恭一，佐々木博，市田文弘：慢性肝炎の特殊診断法——肝生検。内科Mook No.3：38-39頁，1978。

4. その他

1) 井上恭一，柴崎浩一，田代成元，市田文弘，佐藤巖：塩酸チアラミドの肝機能におよぼす影響について。薬理と治療 6：2559-2565，1978。

2) 市田文弘，井上恭一：臍胆道疾患診断の進歩特集・黄疸——内科領域——。臨床と研究 55：2356-2359，1978。

3) 市田文弘，井上恭一：老年者疾患の処方集・肝障害。老年医学 16：1530-1531，1978。

精 神 神 經 医 学

教授 遠藤正臣
助教授 中村一郎
助手 細川邦仁
助手 稲生暁春

1. 研究概要

臨床神経心理学的研究：失語・失行・失認という神経心理学的症状のそれぞれのsub-typeを原因疾患や他の基本的精神症状(痴呆・健忘など)とのかわりから再検討する。そのためにはまず症例の蓄積が第一であり，個々の症例の示す症状の精密な記述・分析を意図している。

図形・文字の認知機構に関する研究：図形や文字の認知における大脳半球優位性の問題を，タキストスコープを用い研究する。さらに対象をpolyplotとし，その大脳半球優位性にも考究をすすめたい。また，動物の視覚連合領とパターン認知に関する実験も準備中である。

臨床脳波学的研究：各種神経疾患での臨床脳波を継時的な視点をもって研究する。症状の推移・諸種検査結果と対比し，脳波のもつ臨床経過記述での優用性と限界について検討する。

神経病理学的研究：剖検例から得られた変性・脱髄性・炎症性疾患の中樞神経系について組織病理学的に検索している。特に多発性硬化症は多数の症例